

● 実施実績データ

【同一地域内連携実施実績データ等】

国立科学博物館・巡回ミュージアム in 沖縄

- ・実施6会場総入場者数：25,435名（前年度同時期比 110%）
- ・アルバムディクショナリーを用いた研修：参加者数14名
- ・標本の取り扱いに関する研修：参加者数18名
- ・観光に関する勉強会：参加者数10名
- ・ゆくゆんミュージアム（アウトリーチ展示）：参加者数202名

【広域の博物館連携実施実績データ等】

国立科学博物館・巡回ミュージアム in 長野

- ・入場者数：18,353名（前年度同時期比 216%）
- ・来場者満足度：93%以上が「満足」・「やや満足」と回答
- ・「かはくのモノ語りワゴン」研修：参加者数24名
- ・シンポジウム「地域の情報発信拠点としての博物館」：参加者数49名

国立科学博物館・巡回ミュージアム in サヒメル

- ・入場者数：19,459名（前年度同時期比130%）
- ・来場者満足度：94%以上が「満足」・「やや満足」と回答
- ・「かはくのモノ語りワゴン」研修：参加者数7名
- ・研修会「世界から見た高見の地質と貝化石」：参加者数12名

【アンケート抜粋】

企画展来場者アンケート

「4才の子が『また行きたい』と言いました。ありがとうございます。」
「沖縄の絶滅危惧種や、沖縄の植物の多様性を学ぶ事が出来て良かった。」
「ボランティアの男の子の説明がとても良かったです。」

研修参加者アンケート

「地域住民等にも（子供達のみでなく）博物館の必要性、又学ぶ場があると良い。その為にはまず自分が知らないと始まらない。そんな意味で私自身非常に勉強になった。」
「昨今はインターネットでほとんどの情報を入手することができるが、文字や写真情報ではわからない微妙な加減などを実際に講師の方から生の声で聞くことができ大変勉強になった。」

事業関係者アンケート

「国立科学博物館の様々な展示に関する技術・ノウハウを地域へ還元していただくことは市民にとっても、博物館職員にとっても有意義と思われます。」
「今回のような連携事業や共同事業は、地域博物館にとってはとても有意義なものと考えます。自然だけでなく、歴史や民族、教育普及等の分野でも声をかけてもらいたい。」

※代表的なデータ・アンケートを抜粋

課題と今後の展望

● 展示制作における連携モデルの構築

同一地域の博物館等連携においては、国立科学博物館がベースとなる展示を作成し、参画館が特徴的な展示物を加えるという新たな連携の在り方が構築できた。一方で、「各館の個性を参画全館と情報共有した上で、巡回展の意義・広報戦略・誘客対策を入念に練る時間をもっと設けるべきであった。」という意見もあり、今回のモデルを基本としつつ、より精練していくことの必要性が見えた。

● 観光資源としての博物館の魅力発信

沖縄のホテルでのアウトリーチ展示は、博物館に足を運ばない観光客への発信としては一定の成果があったが、展開する空間との調和や客層の意識など、実施にあたって留意すべき部分が浮かび上がってきた。

長野に関しては、シンポジウムを契機に博物館と観光振興課の交流が進んだことが成果として挙げられ、引き続き博物館の魅力発信のために連携を続けることが期待される。

観光業界や行政を一例に、博物館が異業種と連携することで、更なる博物館の魅力発信へつながると考えられる。

● 研修事業の形態

研修事業実施後のアンケートより、地方では研修受講の要望が多いものの、予算や時間の都合上、地理的に離れている場所で開催されている研修への参加が難しい現状が見えてきた。このような需要への対応として、地域の中核となる博物館や博物館協会等と連携した研修事業を実施することで、なかなか研修を受講できない博物館等関係者にも研修の機会を提供できると望ましい。



ホテルでのアウトリーチ展示の様子



平成29年度文部科学省委託事業
「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」

「学芸員等の資質向上とネットワークの構築を通じた 博物館の機能強化モデルの提言」 成果報告



事業連携機関

沖縄県立博物館・美術館、（一財）沖縄美ら島財団、名護博物館、宜野湾市立博物館、
沖縄市立郷土博物館、北谷町教育委員会、長野市立博物館、島根県立三瓶自然館

「学芸員等の資質向上とネットワーク構築を通じた博物館の機能強化モデルの提言」

取組概要

● 事業概要・目的

地域の中核博物館と国立科学博物館が連携し、巡回展示を行うだけでなく、学芸員等の資質向上を目指す研修や、観光に対する博物館としての在り方について考える機会を設けることで、ネットワークの構築や地域博物館の機能強化を目指した。

事業は、同一地域内でのネットワーク構築と、地理的に離れた2館の情報共有と発信の2本柱で構成し、地域内での連携強化はもとより、国内の自然科学系博物館の連携強化と地域振興に寄与するためのモデルについて考察した。

具体的な取組として、

①特定地域のレガシー発信のための同一地域の博物館等連携モデルの構築

②地域を越えて取り組みを共有する広域の博物館等連携モデルの構築

の大きく分けて2つの枠組みで実施した。

● 事業 1 同一地域の博物館等連携モデルの構築 - 巡回ミュージアム in 沖縄 -

同一地域内連携のモデルケースとして、沖縄県内の各博物館等と連携した。国立科学博物館で行ってきた「琉球の植物」に関する自然史研究の成果を基に、県内博物館が所有する植物由来の民具等の人文科学系資料との融合を意識し、地域特有の自然とそれにより醸成された地域文化をリンクさせた情報発信をした。

展示以外では研修事業として、博物館の魅力を学芸員等が再認識するための研修と、標本作成に関する研修を実施した。

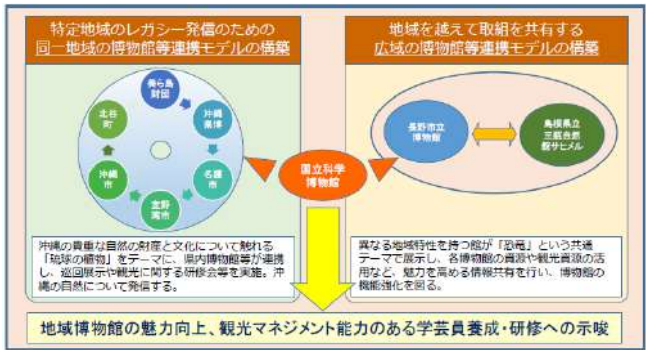
また、観光客の多い沖縄で、博物館の魅力をいかに発信していくかを考えるため、ホテルを会場にした博物館外でのアウトリーチ展示の試行的展開や、観光業界関係者と博物館関係者を交えた勉強会を実施した。

● 事業 2 広域の博物館等連携モデルの構築 - 巡回ミュージアム in 長野・in サヒメル -

広域の博物館連携のモデルケースとして、長野市立博物館および島根県立三瓶自然館と連携し、「恐竜」というテーマで展示を行った。それぞれの展示を実施するにあたり、報道機関と密に連携を取ることで、地元への発信を意識した。

また、学芸員および博物館ボランティアを対象とした研修プログラムや、観光振興について議論するシンポジウムを実施した。研修においては、同一プログラムの研修を各館の状況にあわせてアレンジするなど、地域や背景の異なる博物館の連携を意識した運営を行った。また、これらの事業において、長野市立博物館と島根県立三瓶自然館の学芸員や職員が相互に交流する機会を設けることで、広域の博物館同士が各館の現状について情報共有し、今後の魅力向上に向けて連携するための基盤を作成した。

事業1および2の双方で、昨年度事業で計画していた地域博物館同士の連携作りを引き継ぐとともに、学芸員の資質向上による地域博物館の機能強化という本年度事業の目的に合致することを目指した。



会 場 及 び 会 期	
熱帯ドリームセンター	平成29年7月22日～8月27日
沖縄県立博物館・美術館	平成29年9月8日～10月15日
名護博物館	平成29年10月27日～11月19日
宜野湾市立博物館	平成29年11月25日～12月17日
沖縄市立郷土博物館	平成30年1月12日～2月10日
ちやたんニライセンター	平成30年2月20日～3月2日

会 場 及 び 会 期	
長野市立博物館	平成29年7月15日～9月3日
島根県立三瓶自然館	平成29年10月7日～11月26日



長野市立博物館での展示の様子



国立科学博物館の展示室を模した壁面装飾（三瓶）

事業の特徴・工夫・成果

事業目的を達成するために、①展示、②研修、③観光に関する取組、の3点について、事業1と事業2のそれぞれに適した方法で実施した。

● ①展示について

同一地域の博物館等連携モデルの構築においては、自然史研究を基にした解説パネルを国立科学博物館が作成し、参画館が、植物の実物や植物を利用した地域特有の民具等を展示に加えるという形式を取った。基本となる解説パネルを用意することで、参画館での展示制作を容易にしつつ、各館ごとの特色も引き出せるようにすることを狙いとした。事業実施者を対象とした事業後アンケートにおいては、この展示制作方式に対する好意的な意見が多数見受けられ、当初の狙いと合致する結果が得られたと考えられる。

広域の博物館等連携モデルの構築においては、「恐竜」というテーマを基本としつつ、参画館ごとに特色を出すようにした。長野では、近隣施設の所蔵資料を活用することで、過去の生物の絶滅と長野で進行中の絶滅について発信する内容としたのに対し、三瓶では、国立科学博物館の資料を基に、最新の研究から分かった恐竜学について触れる内容とした。同一の資料を使用しつつも、館ごとの予算や人員の状況によって、展示内容に幅を持たせることが可能であると分かった。



国立科学博物館制作パネルと植物の展示

● ②研修について



アルバムディクショナリ研修の様子

学芸員の資質向上というテーマのもと、事業1および事業2の双方で異なる研修プログラムを実施した。

沖縄においては、あらかじめ記されたキーワードに合致する写真を館内で撮影することで、普段とは異なる切り口で展示資料を見つめ直すことを狙いとしたアルバムディクショナリ研修と、樹脂封入標本の作製と標本データベースの活用に関する講習を組み合わせた、標本の取り扱いに関する研修を実施した。これらの研修は、学芸員の知識や技術を直接的に向上させる研修であり、博物館等施設の持続的な発展には不可欠と考えられる。

長野および三瓶においては、触れる資料と簡単な解説をきっかけに、来館者により展示に興味を持ってもらうプログラムである「モノ語りワゴン」に関する研修を実施した。これらの研修は、来館者の満足度に直接つながることを期待したものであり、実際に長野では、企画展開催中に博物館ボランティアによる運用が行われた。また、それぞれの館の学芸員やボランティア

の活動様式にあわせて既存のプログラムをアレンジした実践を行っており、多様な背景を持つ館へも当該プログラムを導入できることの可能性が示唆された。

● ③観光に関する取組について

国内有数の観光地である沖縄においても、いかにして観光客に地域文化への興味・関心を惹起させ、博物館への来訪へつなげるかは大きな課題の1つである。事業1においては、観光客の滞留する施設であるホテルを会場として、パネルによる解説および民具等の試着により、沖縄の文化を発信するアウトリーチ展示を実施した。実施した2会場のうちの1つでは、多言語対応したパネルを展示し、外国人観光客への情報発信も狙いとした。また、アウトリーチ展示終了後には、博物館関係者と観光業界関係者による勉強会を実施し、今後の観光対応について意見交換をした。

事業2においては、観光に対する博物館の在り方について議論するシンポジウムを長野にて開催した。博物館関係者に加え、行政関係者および観光業界関係者にも広報を行い、複数業種の参加者による多角的な視点からの議論が行われることを狙った。また、このシンポジウムでは、地域事例の紹介のために島根県立三瓶自然館の代表者が講演とともに意見交換を行い、地理的に離れた2館が情報共有できる機会を作ることも狙いとした。開催を通じて、長野市立博物館と長野市観光振興課の間の連携が以前よりも強化されたことが成果として挙げられる。長野市の情報発信のためのリーフレットの作成を、新たに両者が協働で行うという成果も現れており、単回の事業実施にとどまらない継続的な活動が期待できる結果となった。



長野でのシンポジウムの様子